



経営の散歩道

川中経営研究所
所長 川中清司

▼「メイアイスモーク?」—たばこを吸う前に都合を聞く。

海外を旅して感ずるのは、まず相手の立場を考えるエチケット。その欧米人の態度がさわやかなことだ。

彼らの個人主義とは自分勝手ではなくて、お互いの権利を尊重することだと実感させられる。

すでにアメリカでは、たばこのTV広告は禁じられている。

ニューヨークでは四月から禁煙法がしかれ、ほとんどの公共の場所では禁煙、違反者は罰金となった。

▼宇野重吉の死因は肺がんだった。最後まで闘いながら舞台上に生きた壮絶さに感動を覚え、そして肺がんの恐ろしさをしみじみと感じさせられた。

「たばこ関連で毎年三十五万人が死んでいる。エイズ以上の大問題」と、アメリカのシンプ女史（環境改善協会会長）は「喫煙と健康世界会議」で訴えた。

平らに並べると和室三十六畳にいったいどの広さになる。ここで吸いこんだ空気の中から、酸素を吸収する。本人が知らないうちに、その人の体内機関はご主人さまの生命活動を支えるべく、必死に酸素を採り入れている。それなのに、無分別に猛毒のたばこの煙を送り続ける。



自分の体を自分自身で、壊そうとしているのがたばこ人種なのだ。それが平気なのだから、きれいな空気の室内でスモークし他人の肺をよごすことなどに、気がねするはずがない。

▼「全がんの三分の一は禁煙によつて防ぐことができる」(杉村隆・国立ガンセンター総長)原因不明の老人痴呆症の、アルツハイマー病も、ニコチンに

原因があることが判つてきた。予防がん学研究所長の平山雄さんによると「長期間の喫煙者は約五年老化が早く、脳の神経伝達機構も障害される」という。子供の呼吸器に与える影響も大きい。特に乳幼児のそばでボカボカふかすのは毒をのませているのと同じ。小児ゼンソクの原因は従来まで花粉症があげられていたが、最近では家ダニと周囲の人の喫煙が大きいことが判つてきた。

▼「副流煙」とは、たばこの点

第六回

「たばこの煙」

大部分から立ち上る煙のことだが、実に発がん性物質など有害物質が、数倍から数十倍も多く含まれている。

「受動喫煙」とは、自分はそのまないののに、側の喫煙者のけむりを吸わされてしまうことだが、その被害は大きい。妻の肺がんは、夫が喫煙者の場合、のまな

い夫婦の三倍に達する。

▼今、一定時間に限つてのむ、喫煙場所を設けるなど「職場の分煙」を採用するのが常識化してきた。

鯖江商工会議所では昨年一月から、思い切つて「事務所内では禁煙」にふみきつた。職員は我慢より来客の不評を心配したが、実施してみると苦情はほとんどゼロに近い。

禁煙手当を支給したり、採用条件に禁煙を決める企業など、煙害を防ぐためにさまざまなチャレンジがみられる。

▼のむ人に抗議できない日本人人間関係がある。苦しいが黙つてこらえる。これくらいは許されるだろうという甘え。そのバランスは、どうしても喫煙者サイドに傾斜して、のむのが当り前になつてしまう。

▼仕事のあとの一ぶく、食後の一ぶくは、たばこのみだけが知る快感。ある意味では生きがいともいえる。それを奪うのは酷かもしれない。短い人生、たばこぐらいは—という人にとつて喫煙の習慣を断つことはなかなかむずかしい。とすれば、他人に迷惑をかけないのみ方の工夫を真剣に考えねば。